地域産業研究会　報告

第４回食の討論会

開催日：平成 18 年 11 月 14 日（火）15:30～17:30

場　所：ドーコン本社会議室

テーマ：新たな食と農業への挑戦

- 高付加価値化を目指した営農システムの構造改革
- 多様な人材の連携による農と食産業の高付加価値化
- 循環システムによる環境配慮型営農の確立
- 新たな農業者コミュニティーの確立
  （ライフスタイル･ファーマーによる新たな農業者の育成）

講　師：ファームエイジ株式会社　代表取締役　小谷栄二氏

1．プロローグ

・ 日本とニュウージーランドにおける酪農の違い

	日本	NZ
乳価	70 円/l	20 円
補助	有	無
コスト	60 円/l	10 円/l
	6～7 割がえさ代（穀物飼料）	放牧
乳量	7,500kg/頭	3,600kg/頭
搾乳頭数	約 50 頭/軒	約 220 頭/軒
搾乳	通年	搾乳調整（休み期間有り）
草地更新	10 年	30 年
競売市場	国内	世界

・ 日本における放牧地の面積　　20%→5%に減少

・ 現在の酪農家は規模拡大による飼料代（えさ代）の増により疲弊している。

2．高付加価値化を目指した営農システムの構造改革（配付資料 P2,P4）

・ 規模拡大からの脱却

収量 2 割減　しかし、飼料代などのコスト減により手取り収入は現状維持

・ 耕作放棄地の再活用

：和牛の放牧→食肉

副業として行うことにより副収入の糧とする。

・ 放牧牛の搾乳回数調整による頭数の拡大

1 日に 1 回搾乳農家：1 回当たりの乳量は大：えさの食べる量は減

２～３回搾乳農家　：1 回当たりの乳量が減　えさを食べる量は大：えさ代が贈

１日１回搾乳により、1 面積当たりの放牧頭数を増大することが可能となる。

したがって、1 面積当たりの放牧頭数を増大できる。

→　収益拡大

3．　多様な人材の連携による農と食産業の高付加価値化

・　農業以外の人（色々な智恵や知識を持った人たち）が農業を考える
　→　農産物の高付加価値化が可能となる（アイスや乳製品開発　販売）
　　畜舎での集約酪農→規模拡大→糞尿公害
・　外食産業との連携
　→　現況　40%を輸入食品で構成→これを農家（地域）との連携により安全･安心な製品を提供
・　エゾシカの食肉商品化（エゾシカは北海道の貴重な財産）**(配付資料 P3)**
　エゾシカのコントロール：食肉化（現在は農作物や森林被害をもたらす厄介者）
　　○　安定した品質確保による食肉化により高付加価値商品へ→自然肉は希少価値がある。
　　○　間引きによる適量採取の仕組み作り
　　：適性間引き→北海道発大消費地である東京へのビジネス展開

4．循環システムによる環境配慮型営農の確立

・　冬水田んぼの実証実験 **(配付資料 P1)**
　：水の中の種々な生物による有機農法
・　牧草地にイトミミズを生育させことにより土を攪拌させるなど、生態循環による牧草地の改良。
・　消費者は安全･安心な牛乳や米へのニーズは大（価格との兼ね合いはあるが）。
・　どさん子（馬）の放牧により、荒れ地（馬がササを食する）の開墾による高原化。**(配付資料 P1)**
・国土の 7 割が森林の日本で 3 割の内、里山の 1 割が耕作放棄により荒地化している。**(配付資料 P5)**
　：　そこに放牧（馬）により人が手をかけた土地の生態系の保全。
　　（馬、牛などの草食動物の放牧により公園化を進める）
　：　羊を使った町道（農道）脇ののり面の草刈りなど草食動物の活用による整備の推進。

５．　新たな農業者コミュニティーの確立（ライフスタイル･ファーマーによる新たな農業者の育成）
(配付資料 P5)

・　農業以外の人が農村に入ってくることによる（農村の変化）新たなコミュニティーの形成が可能となる。
・　既存農家と一緒に（農家と契約）
　　：農業家を育てる
・　色々なアイデアを出し、農業以外の人が農村生活　地域が活気つく
　　：日本の新たな農業文化を醸成する。
・　農業以外の人（色々な智恵や知識を持った人たち）が農業を考える
　　→　農産物の高付加価値化が可能となる（アイスや乳製品開発　販売）
・　日本の新たな農業文化を醸成する。

以上

（　文責　今井　）